

第四三号



1997

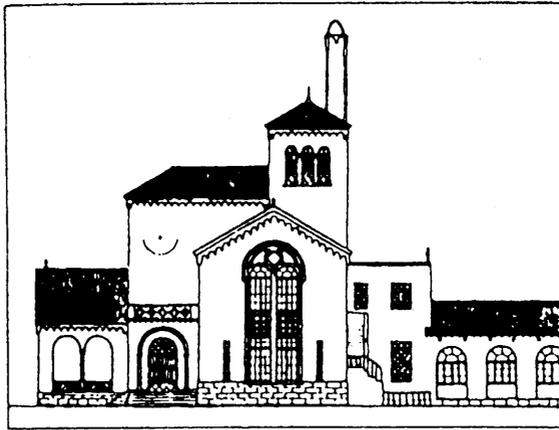
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第 四 三 号

1996年 1 月—1996年12月

も く じ



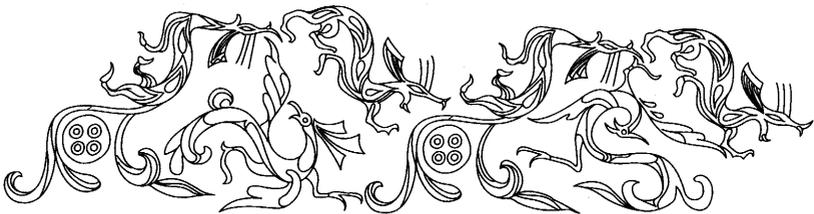
随想	我が谷は緑なりき	梅原 郁
	握られた手	谷 泰
	日本列島の「黄帝明堂」	楊 鴻勳
	日本の理解今昔	ジョシユア・フォーゲル
講演		
夏期講座	アジアの海と日本（籠谷）／中国の古代を掘る（岡村）／ 士族は没落したか（落合）／歴史における事実と真実 （狭間）	
	開所記念講演	
	ローレンツ・フォン・シュタインと明治日本（瀧井）／ 王国維の学問について（井波）／ヴァードゥーラ学派の 新写本について（井狩）	
集報		
共同研究の話題		
	共同研究からはじまること	齋藤 希史
	媒介三年	三浦 國雄
	中国礼制研究班	小南 一郎
	文瀾閣「四庫全書」所収の「王慎農書」	渡部 武
	「象徴主義の研究」班	宇佐美 齋
	主体・自己・情動構築の文化的特質	窪田 幸子
	所のうち・そと	
	「人文」での日々	宮崎 昭子
	司書室	田中 久子
	運筆あれこれ	勝村 哲也
	鴨川の花火	安田 敏朗
	たとえば喪服のてざわりなどということ	木島 史雄
	ヴェネツィアの古文書館	高田京比子
書いたもの一覧		

我が谷は緑なりき

梅原 郁

私が人文科学研究所に入所した時は、大学紛争さ中の、六九年七月だった。研究所でも連日、改革をまさぐる会議や討論が繰返され、傍らの廊下を、学生がプラカードを掲げて走り回ったこともあった。三十年をへた現在から振り返ると、それは戦後の新制大学の抱える問題が一気に噴出したのと同時に、日本の大学が戦前のそれと、著しく違ったものとなってしまった表象でもあった。ここにおいて、明治以来、いわゆる帝国大学と表裏して行われてきた「学問」そのものの意味や内容も、すっかり変質してしまったといつて差支えないであろう。

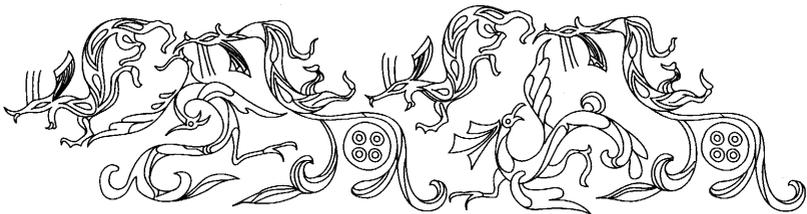
大学院時代から十数年、当時は授業と認められているものもあつた東方面部の共同研究はもとより、研究室単位、あるいは私的に行われていた原典講読会に出席するため、私は毎日のように北白川の建物に足を運んだ。その頃の北白川の研究所は、夜半十二時を過ぎても多数の部室には煌々と灯りがつき、一晩を自室で過ごす所員も一、二にとどまらなかつた。老若の所員たちは、専攻の粹など最初から眼中にいれず、多種多様で血の通



つた耳学間があちこちで享受でき、談論風発でご近所から苦情を持たれることもまた一再でなかった。それが紛争を契機に、文字通り灯の消えたように、ほとんど影を没してしまった。まだ宵の口の十時、真暗な研究所の建物に、一つ、多くて二つの灯りを見ると、まさに往時茫々の感を深くする。東大部の前身である東方文化学院京都研究所の先達たちの、入口と自室と書庫の鍵を共通にした意図は、いわば仮眠中という状況にある。

唐の劉知幾が、歴史家には才・学・識の三者が必要だと言ったことは誰もが知っている。中国では、才は文辞の才つまり表現力、学は記誦で、暗記的な知識の集積、識は撃断すなわち評価、判断の力とされる。普通の人間は、この中の一つを持つことさえ困難で、辛うじて「学」に到らんとして疾苦宮々たる有様である。ところが清朝の章学誠は、才・学・識だけではまだ不十分で、史徳すなわち史家の心術が「識」に伴う必要があると主張する。歴史（天）はとかく心術Ⅱ人情すなわち史観Ⅱ主観で歪められるという彼の見解の正しさは、戦前、戦後の日本における中国史の流れを見ていて首肯せざるを得ない。

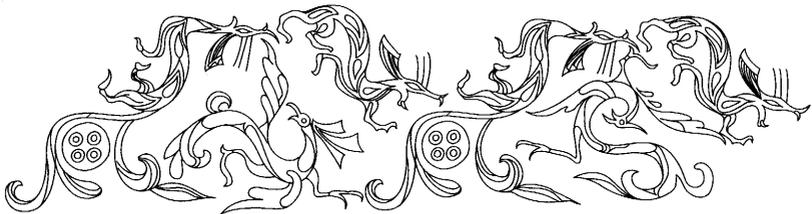
各自がとかく自己一人にとじこもりがちで、最近の東大部の傾向を見てみると、史徳や心術そのものが遙か遠い存在になるように感ぜられる。研究所の蓄積が宝の持ち腐れにならぬよう、若い力がたに期待するところ大なるものがある。



握られた手

谷 泰

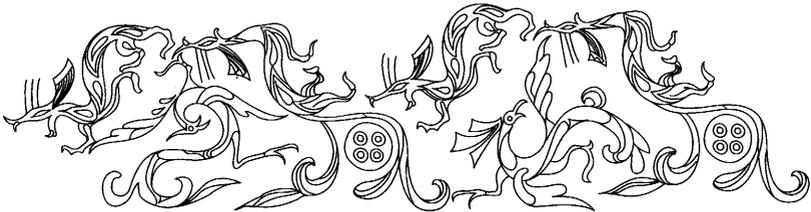
それは一〇年前、インドはカシミールへの二度目の訪問の機会をえて、最僻村アルーから二日、三千メートルの峠をこえた谷で夏期放牧する、バカルワラのキャンプにいたときのことだ。滞在中、谷の上部で仕事をしていたわたしは、ある日、下部峽谷でキャンプをはる貧しい従属牧夫を訪ねることにした。今やしきりに物品をねだる寄留テントの裕富な主人は、あんな奴らのとこに行くのは勧められないといったが、言い張るわたしに「犬が危ないから」と長い金剛杖のような棒を手渡してくれた。ひとりで谷を降る。川に流れ込む支谷ごとに、氷河が運んだモレーン（石の堆積）があつて意外に時間がかかる。しかし快晴、昼過ぎにはほとんど最下部の最終テントのちかくにたどりついた。ことが起こつたのはそのときだった。とつぜん、うなりとともに二頭の牧羊犬がテントの蔭から躍りでて、わたしに牙をむいて迫ってきた。なん秒間のことだったろう。わたしは、両側から迫る犬にむけて、金剛杖をふりまわした。そして棒はいく度か犬の身体にあたり、彼らはたじろいだ。しかしふたた



び迫る犬に棒が強く当たったとき、棒は手元から折れていた。いまや犬は、すきをとばかり襲いかかろうとする。手元にある棒は、もはや彼らを遠ざけるだけの長さはない。誰もいない孤独なガレ場で、裂傷を負うことは確実、その恐怖が、わたしの心臓を凍り付かせた。身体は硬直していた。

そのとき、まさにそのときだった。昼寝から目覚めたひとりの牧夫が、テントから走りでた。ただ犬を追い払うのではない。かれは、棒立ちになったわたしに向かって駆け寄った。そして、わたしの手を両手でしかと握ってくれたのである。傾斜した硬い雪田にいたわたしは、その勢いで倒れた。ただ犬は、牧夫と手を握り合っているのを見て、ピタリと迫ることをやめた。テントに招じ入れられながら、わたしは脚がなえて、しかと歩けなかったのを記憶している。そしてショックから回復したのは、控え目なかれの妻がだす熱い紅茶のみ、一枚の粗いブランケットをかけられた一時間の眠りから覚めた後のことだった。

彼らは、国際交流という言葉など、一度も聞いたことがないに違いない。ただその△握られた手▽の記憶は、生活者としての△牧人の知恵の証拠▽と同時に、異国滞在者の身体にはりつく疎隔の壁に穴をあけて差し出された△人への信頼の証文▽として、研究所の先輩・同僚をはじめ、多くの人の思いがけない好意とならんで、わたしの経験の履歴書にしかと記されている。



日本列島の「黄帝明堂」

楊 鴻 勛

はるか太古のかなた東アジア大陸の沿岸一帯が陥没して、細長く曲がりくねった「地中海」が形成された。オホーツク海、日本海、渤海、黄海、東シナ海、南シナ海などと今おのおの呼ばれる海がすなわちそれであり、この断裂によって日本列島が生まれたのである。この「地中海」周辺では、早くも新石器時代初期から海を渡つての相互の交流が盛んで、それによって輝かしい「東アジア地中海文明」が成立した。

私はこの度、この一衣帯水の「地中海」を越えて日本へやって来たが、驚くべきことに、そこで中華文明の始祖といわれる黄帝の時の「明堂」に酷似した遺跡に巡り会ったのである。司馬遷の『史記・封禪書』によれば、漢の武帝が泰山で封禪の儀式を行った時、公玉帯なる者が献上した「黄帝時明堂図」によつて「明堂」を建てたが、それは「中に一殿あり、四面に壁なく、茅を以つて蓋う。水を通し、宮垣を圍りて複道を為す。上に樓あり、西南より入る、名づけて『崑崙』という。天子これより入りて以つて上帝を拝す」と描写されている。

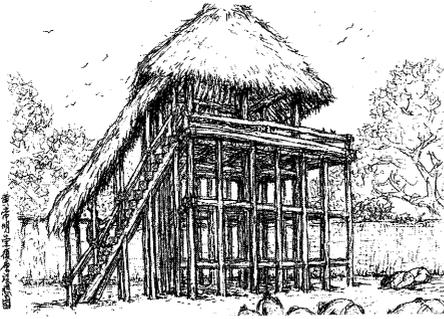


この「明堂」とは、右の記述から見ておそらく日本でいう高床式建築のことであり、京都府向日市中海道遺跡、鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡、群馬県前橋市鳥羽遺跡など弥生時代の神殿跡と考えられるものと同じ形式であろう。なおここで「崑崙（こんろん）」というのは、有名な崑崙山のことではなく、現在中国西南地区の少数民族の間で、高床式建築のことを「干欄（かんらん、干蘭・干欄とも書き、早くは『魏書・獠伝』に見える）」と称するのの古い語形であると私は考える。すなわち武帝が建てた黄帝の「明堂」とは高床式建築のことであって、周代の「政教の堂」として『周礼』などにみえる「明堂」とはまったく別のものであろう。

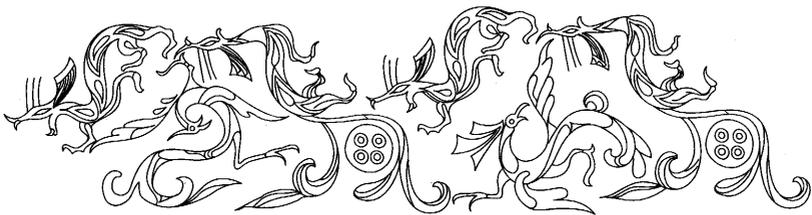
それはむしろ原始氏族の農耕神崇拜の場としての「社」に近いと思える。

『淮南子・主術訓』に、

「むかし神農の天下を治るや、……甘雨時に降り、五穀蕃植す。春生じ、夏長じ、秋収め、冬蔵す。月に省み、時に考え、歳終わりて功を献じ、時を以って穀を嘗め、明堂に祀る。明堂の制は、蓋あ



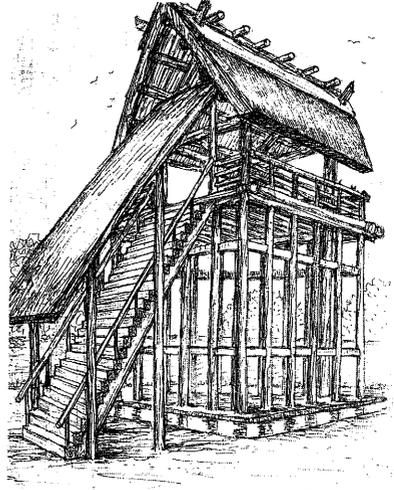
原始氏族の社“黄帝時明堂”想像図
—崑崙（干蘭・命・ganlan）



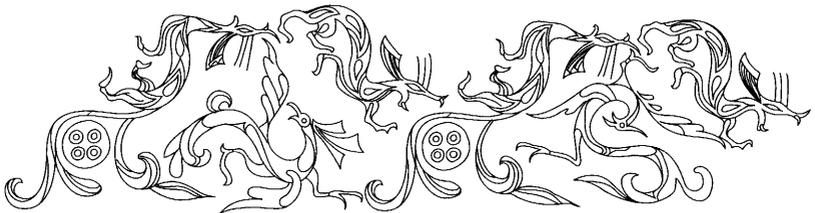
るも四方なし」というのは、農耕神崇拜の「社」としての「明堂」であろう。

神農のものにせよ黄帝のものにせよ、原始氏族の「明堂」の遺跡は、いまだ中国では発見されていない。ところがそれによく似たものを、なんと日本で見ることができたのであった。中日の文化的因縁は、隋唐以来のたかだか千数百年にかぎったことでは決してないのである。

(金文京訳)



長瀬高浜弥生時代“社”遺址復原図



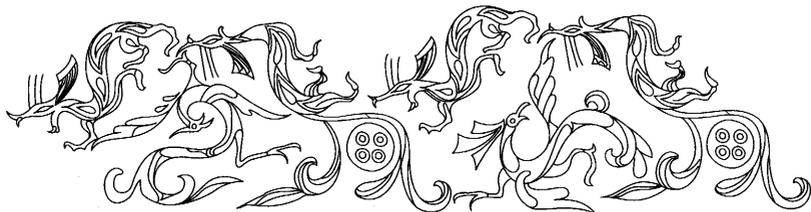
日本の理解今昔

ジョシユア・フォーゲル

一九七六年一二月に初めて来日していらい、二〇年間ほぼ毎年、時に長く時に短く日本に滞在している。日中関係史を専門として、日本で資料を集めたり研究者と交流したりすることは、私にとって非常に重要だと思っている。

今回、私は清朝中期の翁広平というあまり知られていない日本研究者を中心テーマとして、明清時代における中国人の日本観を研究している。明末に、日本からの持渡書『吾妻鏡』を翁は知合いの書齋でふと見付け、日本のことを学ぼうと決心した。彼は七年間（一八〇七—一八一四年）に一九〇冊以上（一五三冊は漢籍、ほかは日本と朝鮮の典籍）を通読した上で、傑作『吾妻鏡補』二〇巻を著したが、それは今もって出版されていない。ようやく、今年の春頃までに京都の朋友書店が活字にすることになっている。

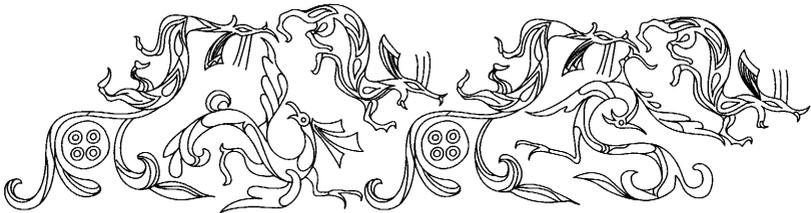
その七年の間、翁は、清朝の厳しい法律と自分の貧乏故に、一度も来日できず、必要な知識は中国に舶載された書物に仰いだ。それでいて、分厚い日本地方志のような『吾妻鏡補』を書



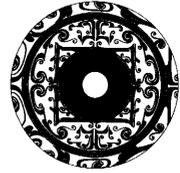
いたのである。しかもその中に「国語解」という日本語の解説も含まれていた。

ほぼ二百年が経った今、私は『吾妻鏡補』を読みながら、翁が日本の歴史や文化をどの程度までわかるようになっていたかと考えている。彼ほどの程度まで日本そのものを理解していたか。毎年日本に来ることができ、その間に日本語ももちろん勉強している私は、はたして翁広平より日本のことを知るに至ったか。かりに日本をよく理解したとして、それはどのような形に現われているか。逆に日本に生まれ育った日本人なら、私や翁より日本を正確にわかるのか。結局、国を理解するとはどういう意味であろうか。翁広平がこういう方法的疑惑を抱いたかどうかはわからない。日本を外国から見るということで、私は翁とこのような結び付きを感じている。

最近アメリカの学界で、*identity politics* という新しい運動が強まっている。この運動の中心的主張は、或る国とか或る民族とか或るジェンダーの一人でない、それを対象とする学術問題は全然わかることができず、解説する権利も絶対にならないのである。もちろんこの運動を支持する人々が正しいのであれば、翁も私も日本の文化や歴史など研究すべきではない。しかし、もしそうだったら国際交流も国際理解も無理であろう。ただ、この誤った論にも、間接的に同意する点が一つだけある。外国のことを研究するのは、不可能ではないとしても非常に難しいということである。外国を見る時、自分の文化的政治的偏



講演



夏期講座（一九九六年度）

七月五日―六日
於 本館会議室

アジアの海と日本

籠谷直人

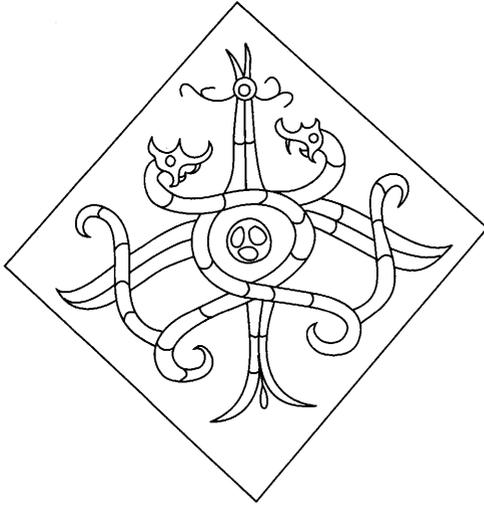
冷戦構造の後退後、アジアにおいても「主権国家」形成競争ともいえる地域ごとの新たな自己主張が起って来ている。アジア経済の成長の持続については多くの議論が展開されているが、経済成長を背景にアジアの各地域が周縁ナショナルリズムともよべる地域主義を主張するようになったことは認められる。他方で近

年のアジアでの新しい動向として注目されるのは、アジアNIEsの成長と関係した日本海、華北、華南といった「環海」（アジア都市間）経済圏の成長であり、そのなかでの地域間ネットワークの成熟である。前者が国家や民族としての「公式」の存在形成であるとするれば、後者は域間の「非公式」な存在であるともいえる。

一九七〇年代のアジアNIEsの成長に始まり、八〇年代の中国の解放政策によって東南アジア・中国の台頭は顕著であり、その追い上げを受ける日本の再編にも目を見張るものがある。こうしたなかでアジアにひろがる金・人・物・思想の移動を内容にした、域内ネットワーク（主に華僑、印僑の存在）の現代アジアの成長に果たした役割が強調され、国家の後援を十分に獲得できない経済主体のアジアでの役割に注目する傾向が強まった。「国民経済」的な枠組をこえた地域の連鎖を新たに検討の対象にすることが求められ、そうした「非公式」な制度の歴史的相契が新たに問われるようになったと考えられる。国家や民族とは異なる視点が求められている。

つまり問題の焦点なるのは、アジアにおけるこうした「非公式」制度と「公式」制度との統合的な理解をいかに獲得するかであり、歴史学のなかにも日本のア

アジア認識の方法としてそれを位置づけることにある。アジアのダイナミズムは両者の統合的な把握を通して検討が可能になると考えられる。そうであるとするれば、日本におけるアジア国際関係史の課題は地域主義を一国史観を越えた広域な地域システムの機能と安定性のなかでとらえなおすことにあるとえる。報告では日本を立脚点として、「日本と海」を素材に、この両制度を統合的に理解し、近代世界史におけるアジア世界について新たな見解を求めようとするものである。



中国の古代を掘る

——日中共同発掘の現場から

岡村 秀 典

中国では、各地で遺跡の発掘調査が大いに進み、土器型式の時間的変異と空間的変異をもとに、さまざまな考古学の地域文化が設定された。この研究は中国では区系類型論、欧米では文化史考古学と呼ばれる、基本的、客観的な考古学の方法である。ところが土器をはじめとする文物の研究に執着するあまり、型式Ⅱ文化Ⅱ民族と錯覚し、特定の遺物型式を夏や殷といった歴史上の民族に同定したり、王朝交替の事件史に付会する傾向がある。とくに中国では、多民族共生の国家建設に奉仕するため、考古学から中華民族の形成史を研究する必要性がさげばれている。

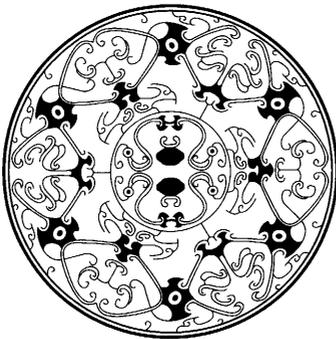
近年、欧米ではこれにかわる新しい考古学を目指す動きがある。それは偶然の事件史や中国史、日本史という個別の歴史を研究する補助学ではなく、農耕・牧畜の起源や国家の形成など、人類全体に普遍化できる人間行動の理論構築をめざしている。たとえば、環境

への人間の適応戦略を研究するため、形ある人工物だけでなく、人間と環境にかかわる動植物などすべての遺物を多角的に研究している。考古学と動植物学、農学といった自然科学との共同研究が始まり、さらに実験室での分析に物足りなくなった自然科学者は、自分の目的意識による遺跡の発掘調査を実施している。

伝統的に歴史重視の考古学の日本や中国では、このような新しい方法はすぐに受け入れられなかった。とくに日本の中国考古学は、長らく文物研究に没頭し、フィールド調査から離れていたために、一九九一年に外国の考古隊との共同調査が中国で認められるようになった。でも、新しい考古学を実践する態勢にはなかった。この中で、宮崎大学農学部の藤原宏志さんは、イネ科植物にふくまれるブランド・オパール（植物珪酸体）をもとに水田遺跡を探しだす方法を開発し、一九九三年より水田稲作の起源を求めて中国江蘇省草鞋山遺跡の農学的調査にのりだし、私もそれに参加した。

いっぽう、五〇〇年前にさかのぼる中国最古の巨大な城郭遺跡が長江中流域で発見され、「黄河文明論」に対するアンチテーゼとして、稲作農耕文化の先進性をとнаえる「長江文明」論が近年提起されている。しかし、人類史に普遍的な文明論を構築するには、黄河流域との優劣よりも、城郭集落の構造や性格、その出

現のプロセスなどの解明が必要であり、私は、藤原宏志さんから自然科学者の協力を受けて、一九九五年から城郭遺跡のひとつ、湖北省陰湘城遺跡を地元の湖北省荆州博物館と共同で発掘している。その成果の一部は『東方学報』に中国文で報告した。



士族は没落したか

落 合 弘 樹

教科書的には士族の多くは早い段階で賃労働者化したと説明される。事実、士族の窮乏を伝える史料や記録には事欠かない。ただ、戦後の歴史学は民衆と対極の存在としてネガティブに士族を評価しがちで、その実態に関する検討が不十分となり、むしろ社会学者による研究が進んだ。ここではエリート形成および社会移動の観点から士族の重要性が提起され、「没落」のみに関心を集中させて士族を評価する姿勢に一石を投じている。

とりわけ園田英弘氏らによる『士族の歴史社会学的研究』（九五年、名古屋大学出版会）は、政治や経済の激変に比べて士族の意識や日常の慣習行動レベルでの変化は緩慢で、結局のところ明治期に階層間や身分間での大規模な逆転劇はなかったとの結論を導き出した。画期的内容を持つ研究だが、同時に違和感も感じる。たとえば、統計を主とした彼らの分析は維新前と

日露戦争後が対象外となるなど時期が短く、歴史家の土俵が狭いのと同様に必ずしもマクロ的ではない。また、平均的事例の集約が常に全体的傾向を示すとはいえず、逆に鹿児島のような極端なケースであつても全体構造から見ると無視できない場合もありうる。

士族研究で最も重要でありながら不足しているのは政治史的分析であろう。士族（旧藩士）はそもそも政治・軍事的な集団であり、幕末の高い政治意識が近代国家でどのように消化されたのかは重要な問題といえる。また、明治初年は士族対策が重要な政治課題の一つとなっており、士族の位置づけをめぐる様々な議論もなされた。政府側は「取り込み」と「切り捨て」の両面を駆使して士族に対処したが、その機能のありかたも無視できない。私はそうした点に着目し、史料を中心に士族の具体的状況と政府側の対応を分析している。近代日本史の研究は問題関心が特定の部門に集中しがちだったため、見過ごされてきた事象が多く、さらに最近重要な史料の読み方が再検討されるケースも現れている。他の学問領域による成果にも十分に目を配らなければならぬが、歴史研究においてはまだまだ地道な基礎作業も大切ではないだろうか。

歴史における事実と真実

—— 孫文の三民主義と

毛沢東の解釈を例として

狭間直樹

ここで用いる事実と真実という語について、とくに深い意味合いはないのであって、事実と真実とが往々違うものであることが分れば良い。

日中両国の近代史上において物議をかもした「田中メモ」の場合を考えてみよう。一九二七年、東方会議の決定にもとづいて田中義一首相が作成したという上奏文のことだが、蔡智堪なる日本国籍で台湾出身の人物が皇居の奥深く潜入して写しとったとされるもので、一九二九年末に中国の雑誌にはじめて掲載された中文抄訳が発火点となった。

「メモ」に記された青写真が日本のその後の大陸侵略のコースとあまりにも符合するものだったので、中国側では真の上奏文とみなされ、蔡は戦後に国民政府の表彰まで受けたのである。いまではその贋作なることが学界ではほぼ認められるにいたっているのだが、日中十五年戦争中に抗日宣伝に活用されて東京裁判に

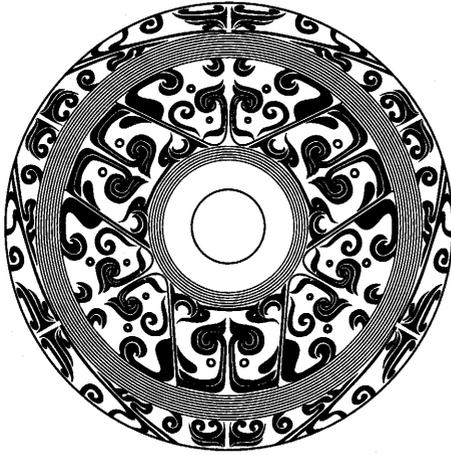
も登場したばかりでなく、その後もながく真物との扱いを受けたというのが、歴史のうえでの事実だったのである。これは、ことがらの出発点においてカラクリが仕掛けられて事実と真実の乖離が生じた場合といえる。

孫文の三民主義にたいする毛沢東の解釈の場合はやや異なる。当初、毛が国共合作時期の三民主義は新三民主義であり、その内容は「連ソ、連共、労農援助」の三大政策だと言ったときには、それは毛による三民主義にたいする一つの解釈だった（正確にはその前史があるのだが）。

ところが毛の解釈が孫の三民主義を共産党の新民主主義と結び付けるのにきわめて整合的なものだったということもあって、とくに大陸ではそれが孫文自身の思想そのものと見做されるようになり、しだいにその解釈が幅をきかして事実とされるにいたったのである。しかし、孫文が三大政策を決定したのではなく、むしろ国民革命の展開のなかで、中国共産党の側で孫文思想の評価すべき諸要素を三大政策なるスローガンとして定着させたというのが、歴史の真実なのであった。これは、のちの解釈がさきの史実を圧倒し、事実と真実の乖離が生じた場合といえる。

真実が明らかとなったからと言って、歴史上で事実

として扱われてきたことからの持つ意味が抹殺されて
しまう訳ではけっしてないが、真実と乖離した事実が
一般的な認識として通用してきたことに、新たな問題
視角が設定され、歴史の総合的把握にとつてのより高
次の地平が切り開かれることになるであろう。歴史研
究の一つの魅力はここにある。



開所記念講演

(一九九六年度)

十一月七日
於 京大会館

ローレンツ・フォン・シュタインと明治日本

瀧井 一博

ローレンツ・フォン・シュタイン (Lorenz von Stein, 1815-1890) は、明治一五年に憲法調査のため渡欧した伊藤博文の一行が、ウィーンにおいて師事した国家学者として知られている。従来、この人物が日本近代史に登場するのは、専らこの一事をもってであったといつてよい。ところが、当時の新聞、雑誌、政治家の書簡や回顧録を渉猟してみれば、彼がその頃わが国において勝ち得ていた異常な人気に気付かされる。実際、伊藤の訪問以後、ウィーンのシュタインのもとを日本の各方面のエリートたちがひっきりなしに訪れ、彼の教えを受けようとしていた。その様子はさながら、「シュタイン詣で」と呼ぶべきものであったといわれ

る。だが、注目すべきは日本とシュタインの関係が、単に日本人からの一方通行のものにとどまることなく、シュタインの側でも当時の日本に対して旺盛な関心を示し、彼らを受け入れていたことである。それどころか、両者の関係の発端には、シュタインからの日本人へのアプローチすら認められるのである。この点を念頭に置きながら、シュタインと日本との交渉の足跡を年表にして紹介し、次に当時のドイツの新聞雑誌に寄稿されたシュタインの日本論を検討した。在澳日本公使館附参事官という役職に就いていた彼は、ヨーロッパにおける日本政府の顧問として働いていた。その活動の一環として、シュタインは日本の政治、社会、文化の事情とその発展ぶりを彼の地の公衆に広め、日本とヨーロッパとの文明的共通性を宣伝していた。彼はいわばヨーロッパの地における日本政府のスポークスマンだったのである。そのようなシュタインの日本に関する言説には、外に向けての西欧化内に対しての国粹論の高唱が指摘できる。その背景にあるのは、自国の歴史を土台とし、そうすることでナショナリズムを興し、国民国家としての主体性を確立しつつ、西欧近代の継受を図るというイメージであろう。そしてそれは国民国家としての自意識を確立して、ヨーロッパを中心とする国際秩序に参入するという明治国家の国是

と見事に照応したものであったのである。



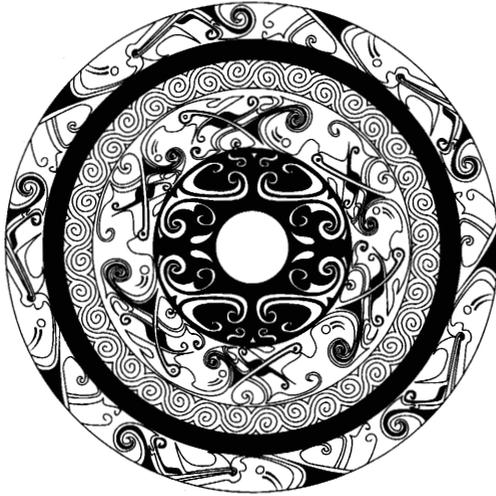
王国維の学問について

井 波 陵 一

王国維（一八七七—一九二七）の学問は、辛亥革命までの前期と辛亥革命以後の後期に分けられる。前期ではドイツ哲学、ついで詞が研究の対象となった。哲学研究では、真理とは何かという根本的課題を、理論的に一気に大所高所へ昇りつめることで解釈しようとする。詞の実作と評論活動では、詞の言葉を選んだり味わったりするという個別の行為の中に人間活動の本質的なものが潜んでいると考えた。後期の王国維は実証を重んじる歴史学をそのテーマに選んだ。前期から後期への転換期に著したのが『宋元戏曲考』である。「二代には一代の文学がある」と述べた王国維は、従来のジャンルに順応した表現のあり方を束縛と感じ、それを振りほどいて新たなジャンルを築き上げる力、すなわち言語表現に対して普遍的に存在する人間の欲求に根ざした結果として一代の文学を承認している。彼は戯曲というジャンルが熟せられてきた、太古以来

のプロセスをたどり直すことによって、中国の戯曲が他のジャンルと同質の価値を持つことを明らかにした。王国維の歴史研究は従来の学説の安定や補強に向かうのではなく、歴史の断絶、不連続の連続を指摘して社会の根本的変革、革命的転換の事例を明らかにする傾向を持ち、変革を歴史における必然と捉える。しかしそれは伝統や制度を一概に否定し去るものではない。今日の伝統や制度を生み出したかつての創造力を、我々もまた発揮すべき力としてとらえ、人間の生の充実が伝統や制度として現実化されるプロセスを、新しい条件の下で絶えず歩むことなのである。歴史の再構成、再解釈を試みて過去に遡るとは、現在と過去に生き生きとした関係を取り戻させることだと言えよう。王国維は清朝の学問を概観して、「国初の学は大、乾嘉の学は精、道咸以降の学は新である」と述べた。あくまで現実の政治にコミットすることを最終目標とした国初の学、精密化を重視し、それが結果として当時の政治に役立つこともあった乾嘉の学、レベルとしては国初や乾嘉の学に劣るが、新しい時代に対応する学問の在り方を追求した道咸以降の学——それを受け継ぐ今日、時勢はまた激しく変化しているというのが王国維の現状認識である。『殷周制度論』を書くに当たって彼が意識したのは、「国初の学は大」の代表者顧

炎武だったから、彼自身どこかで時代と切り結ぶ意志を固めていたと思われる。



ヴァードウーラ学派の新写本について

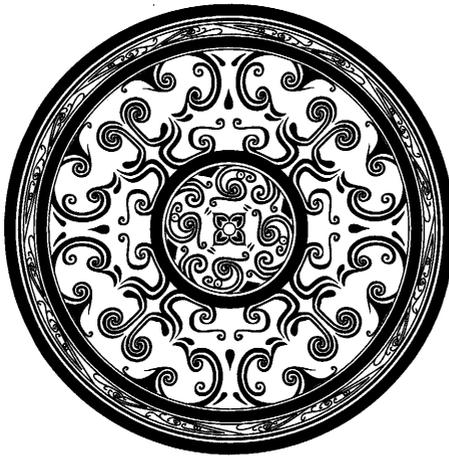
——失われた古代インド祭式文献の再発見

井 狩 彌 介

はじめは、私が古代インドのヴェーダ祭式の研究に深入りすることになった「アグニチャヤナ」という、大煉瓦数千個をもちいて巨大な鳥の形に祭壇を組上げるという壮大な規模を持ち、思想的にも深い意味をになう祭式の研究をまとめにかかる途上だった。ヴェーダの各祭式学派のなかでも古層に属するヴァードウーラ学派の祭式伝承を資料の一環として取り上げてみると、これが他派といっぼう異なった興味深い資料らしいことが分かってくる。ところが公刊されているテキストは、かつてヴェーダ祭式研究の第一人者だったオランダのカーラント博士が一九二〇年代に一連の論文に出した断片集のみがすべてで、わたしの研究に必要な祭式の全貌を与えてくれるだろう資料はヨーロッパとインド各地の写本図書館に収蔵されている写本資料である。当時この派の情報にもっとも詳しくあったのはW・ヴィッツェル博士（現ハーヴァード大、当時ラ

イデン大学) だった。彼はわたしがヴァードゥーラ派に興味を抱いていることを知るとただちに、自分が長年に亘って集めたヴェーダ写本資料のうちの当派の關係部分をすべて快く送ってくれたのである。好意に感謝しつつ同写本の検討をはじめたところ、しかし、彼が収集したインド各地とヨーロッパの資料でもわたしの望むような形で研究はできないことが次第に明らかになってきた。その第一の理由は、当時知られていた写本のすべてに大幅な欠損があり、テキストのほとんど各ページに亘って長い欠落が起こっていたからである。さらに、既存の写本資料がすべて、まだ発見されていないひとつの原本に基づいていることが分かった。現存写本のすべてに共通する欠損はその失われた原本の破損に発しているようである。かくてわたしのささやかな執念が、まだ誰も知らない原写本と、これとは別系統の欠損の少ない写本群を探索する旅にわたしを駆り立てることになった。三度のインドでの現地調査と既存の写本情報にもとづく推理の結果、紆余曲折をへて一九九四年秋に南インドのケーララ州の中部の古都イリンジャーラクダの郊外に住むこの派の伝承家系のふたつの家を尋ねて探していた古写本を検討することができた。数十の埃まみれの写本をひとつひとつ確認する作業を経て、結果的には当初の予想を遙か

に上回る新資料を発掘することができた。幸運にも、その多くは学界にまったく知られていなかった新しい発見だった。生きた口頭伝承が既に絶えているこの派の写本にはタイトル、コロホン自体に誤りが多く、そのことが新資料の発見を遅らせていたわけである。



おくりもの

- 。梅棹忠夫名誉所員は、京都大学名誉教授の称号を授与された(一月九日付)。
- 。柳田聖山名誉教授は、勲三等瑞宝章を授章(十一月三日付)。
- 。フォレ／オゾーフ『フランス革命事典(1・2)』(河野健二・阪上孝・富永茂樹監訳)により、第三十三回日本翻訳出版文化賞が、みすず書房にたいして授与された(九月三十日)。

計報

- 。河野健二名誉教授(七九歳)は、八月一日逝去。
- 。Cornelius Overhand 元外国人研究員(客員教授) チュエリヒ大学名誉教授(七五歳)は、九月五日オランダ国ヘイルーにて逝去。
- 。高田京比子氏を助手(西洋部)に採用

人のうごき

- (一月一日付)。
- 。鈴木啓司(西洋部)助手は、辞任(三月三日付)の上、名古屋学院大学講師に就任。
- 。稲葉 穰(東方部)助手は、辞任(三月三日付)の上、龍谷大学助教授に就任。
- 。三浦國雄大阪市立大学教授は、併任教授(比較文化研究部門、四月一日〜一九九七年三月三十一日)。
- 。串田秀也大阪教育大学助教授は、併任助教授(比較文化研究部門、四月一日〜一九九七年三月三十一日)。
- 。岩井茂樹京都産業大学助教授を、当研究所助教授(東方部)に採用(四月一日付)。
- 。北垣 徹氏を助手(西洋部)に採用(五月一日付)。
- 。安田敏朗氏を助手(日本部)に採用(六月一日付)。
- 。森本淳生氏を助手(西洋部)に採用(九月一日付)。

- 。田中雅一助教授(西洋部)は、委任経理金により、二月二八日大阪発、ロンボ漁業省に於いてスリランカにおける漁業に関する情報収集、シニ基金研究所に於いて「欧亜フォーラム」出席及び研究交流、ロンドン大学に於いてスリランカの水産資料収集を行い、一月二四日帰国。
- 。藤井正人助教授(西洋部)は、一月八日大阪発、パニヤール村周辺に於いてサーマヴエーダ伝承の現地調査を行い、一月三〇日帰国。
- 。高田時雄助教授(東方部)は、文部省科学研究費補助金により、二月一八日大阪発、イタリア大使館及びロス家に於いてロス文庫の調査研究を行い、二月二四日帰国。
- 。山本有造教授(日本部)は、一橋大学経済研究所COE経費により、二月二四日大阪発、ソウル大学経済学部に於いて「韓比較長期経済統計研究会」に出席、二月二八日帰国。
- 。金 文京助教授(東方部)は、三月七日大阪発、香港中文大学に於いて「粵劇粵曲語文検討会」に出席・研究発表

を行い、三月一日帰国。

。瀧井一博助手（日本部）は、委任経理金により、二月二〇日大阪発、デュッセルドルフ大学、エッセン大学、ウィーン大学、プラハ大学、ベルリン自由大学に於いて明治期日本人のヨーロッパでの国家理論修得過程の研究のための資料調査及び研究交流、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州立図書館、キール大学に於いて資料調査を行い、三月一九日帰国。

。田中雅一助教授（西洋部）は、三月二九日大阪発、シンガポール大学に於いて「アジアの諸宗教についての日本人による研究をめぐって」ワークショップ参加・研究発表を行い、四月一日帰国。

。石川禎浩助手（東方面）は、三月三一日大阪発、社会科学院近代史研究所、社会学研究所に於いて中国近现代史に関する研究資料の収集を行い、四月六日帰国。

。岡村秀典助教授（東方面）は、三月八日福岡発、荆沙市内に於いて湖北陰湘城遺跡の発掘調査を行い、四月一〇日

帰国。

。岡村秀典助教授（東方面）は、四月一日大阪発、荆沙市内に於いて湖北陰湘城遺跡の発掘調査を行い、四月三日帰国。

。富永茂樹助教授（西洋部）は、五月一日大阪発、カリフォルニア大学サン・ディエゴ校に於いて国際研究会「公共空間とデモクラシー」に参加及びフランス革命史に関する資料収集、ケベック大学モントリオール校に於いてセミナー「合理主義と政治哲学」に出席、五月二二日帰国。

。藤田隆則助手（西洋部）は、七月一日大阪発、サンバ・リカンアアジア典礼・音楽研究所に於いて東アジアの歌唱法の比較研究を行い、八月一〇日帰国。

。宇佐美 齊教授（西洋部）は、七月一日大阪発、ジャック・ドゥーゼ文学図書館及びフランス国立図書館に於いてフランス近代詩に関わる草稿研究、トゥールーズ・ル・ミライユ大学に於いて「日本におけるフランス近代詩の受容」に関する研究会出席、八月一

二日帰国。

。麥谷邦夫助教授（東方面）は、国際研究会研究員派遣旅費により、八月一日大阪発、五洲大酒店に於いて「道家文化国際学術シンポジウム」に出席、八月一七日帰国。

。金 文京助教授（東方面）は、八月一日大阪発、韓山書院に於いて「饒宗頤学術検討会」に出席・研究発表、香港大学に於いて香港文学に関する資料収集を行い、八月二三日帰国。

。前川和也教授（西洋部）は、七月五日大阪発、大英博物館に於いてシュメール楔形文字文書の研究を行い、八月二四日帰国。

。谷 泰 教授（西洋部）は、七月二四日大阪発、ブカレスト民族学博物館、トランシルヴァニア民族学博物館及びピストリッツァ地方、ベルガモ県北部山村に於いて牧民文化関係資料収集を行い、八月二八日帰国。

。荒牧典俊教授（東方面）は、九月二日大阪発、ドイツ恵光寺日本文化センターに於いて「因果律に関する仏教シンポジウム」に出席・研究発表、ライ

デン大学に於いて J. Vetter 教授と原
始仏教に関する研究討論、ハンブルグ
大学に於いて L. Schmitzhausen 教授と
仏教起源論に関する研究討論、デュッ
セルドルフ大学に於いて V. Bach 教
授と中国における仏教受容に関する研
究討論を行い、九月一二日帰国。

梅原 郁教授（東方面）は、文部省科
学研究費補助金により、八月二九日大
阪発、民族学博物館及び東アジア博物
館に於いてスヴェン・ヘディン将来品
の調査研究及び資料収集、フランス国
立文書館に於いてペリオ収集敦煌写本
の閲覧及び資料収集を行い、九月一八
日帰国。

安富 歩助手（日本部）は、文部省在
外研究員旅費により、三月二九日大阪
発、ロンドン大学経済学部に於いて大
自由度力学系としての経済の研究を行
い、九月二七日帰国。

高田時雄助教（東方面）は、九月二
四日大阪発、甘肅工業大学接待中心に
於いて「中国敦煌吐魯番学術討論
会」出席、上海図書館に於いて敦煌関
係資料収集を行い、一〇月三日帰国。

高田京比子助手（西洋部）は、一〇月
三日大阪発、パドヴァ大学、ヴェネツ
ィア国立古文書館に於いてイタリア中
世史に関する調査を行い、一〇月一五
日帰国。

森本淳生（西洋部）助手は、一〇月一
五日大阪発、パリ第一二大学、フラン
ス国立図書館に於いてポール・ヴァレ
リーに関する調査・資料収集を行い、
十一月一日帰国。

森賀一恵（東方面）助手は、文部省科
学研究費補助金により、一〇月二七日
大阪発、ローマ国立図書館、フィレン
ツェ国立図書館、ボローニャ大学、ヴ
ェネツィア国立図書館に於いて漢籍調
査及び宣教師の手になる中国語史資料
の研究を行い、十一月九日帰国。

高田時雄（東方面）は助教は、文部
省科学研究費補助金により、一〇月二
七日大阪発、ローマ国立図書館、フィ
レンツェ国立図書館、ボローニャ大学、
ヴェネツィア国立図書館に於いて漢籍
調査及び宣教師の手になる中国語史資
料の研究を行い、十一月五日帰国。
田中 淡（東方面）教授は、ユネスコ

文化遺産保存日本信託基金により、一
〇月三十一日大阪発、大明宮含元殿発掘
現場に於いて「大明宮含元殿遺跡修復
事業専門家会議」に出席、社会科学院
考古研究所に於いて資料調査を行い、
十一月三日帰国。

藤田隆則（西洋部）助手は、八月二五
日大阪発、イリノイ大学音楽学部、
コーネル大学に於いて東アジア伝統音
楽の伝承様式についての研究、ハワー
ド・ジョンソンに於いて「民族音楽学
会」に出席、十一月一八日帰国。

稲本泰生（東方面）助手は、文部省科
学研究費補助金により、十一月五日
大阪発、インド美術館に於いて博物館
遺物調査、プリンス・オブ・ウェール
ズ博物館、エレファンタ、カネリーに
於いて博物館遺物調査及び仏教遺跡調
査、アウランガバード、エローラ、ア
ジャンター、バージャヤ、ベドウスー
に於いて仏教遺跡調査を行い、十一
月二九日帰国。

船山 徹（東方面）助手は、文部省科
学研究費補助金により、十一月五日
大阪発、インド美術館に於いて博物館

遺物調査、プリンス・オブ・ウェールズ博物館、エレファンタ、カネリーに於いて博物館遺物調査及び仏教遺跡調査、アウランガバード、エローラ、アジャンター、バージャー、ベドゥウサーに於いて仏教遺跡調査を行い、一月二十九日帰国。

。桑山正進（東大部）教授は、文部省科学研究費補助金により、一月二日大阪発、タキシラ遺跡に於いて仏寺構成要素の現地調査を行い、二月六日帰国。

。岡村秀典（東大部）助教授は、文部省科学研究費補助金により、一月三日大阪発、大英博物館に於いてガンダーラ遺物の調査を行い、二月一日帰国。

。勝村哲也（東大部）助教授は、文部省科学研究費補助金により、二月二六日大阪発、香港中文大学、マカオに於いてヨーロッパ人の中国探検に関する資料収集を行い、二月二十九日帰国。

。曾布川 寛（東大部）教授は、委任経理金により、二月二七日大阪発、中央研究院歴史語言研究所、故宮博物院

に於いて中国美術資料の収集を行い、二月三〇日帰国。

外国人研究員

。Paisley Nathan Livingston マッギル大学教授

西洋近代化における文学・芸術の学際的研究
（比較社会客員部門）

受入教官 富永助教

期間 一月一日～八月三十一日

。Joshua Andrew Fogel カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授

中国史・近代日中関係史の研究
（日本学客員部門）

受入教官 山室助教

期間 六月二〇日～

一九九七年五月三十一日

。楊 鴻勳 中国社会科学院考古研究所
研究者
中国建筑史・庭園史の研究
（比較社会客員部門）

受入教官 田中教授

期間 九月一日～

一九九七年四月九日

招聘外国人学者

。Anne Mette Hjort マッギル大学助
教授

ポスト構造主義以後の文学理論

受入教官 大浦助教

期間 一月一日～八月三十一日

。G. Aurora Testa ナポリ東洋大学ア
ジア研究科研究員

唐洛陽城の考古学的研究

受入教官 桑山教授

期間 二月一日～三月三十一日

。國 慶華 チャルマス技術大学研究員
中国及び日本建築の研究

受入教官 田中教授

期間 五月二〇日～

一九九七年五月一九日

。Ronald Paul Toby イリノイ大学教
授

日・中・朝間の相互認識と誤解につ
いての研究

受入教官 山室助教

期間 六月一日～七月一日

。何 培斌 香港中文大学副教授

唐代仏教建築と日本仏寺の比較研究

受入教官 田中教授

期間 六月三日〜八月一五日

。Tansen Sen ペンシルヴァニア大学
助手

唐宋時代中印交渉史の研究

受入教官 桑山教授

期間 六月二〇日〜一月三〇日

。Joan E. Judge ユタ大学助教

臣民から市民へ―明治日本と清末中国
における「民」概念の変容―

受入教官 狭間教授

期間 六月二七日〜

一九九七年六月一九日

。Mark W. Allon ロンドン大学講師

原始仏教經典の伝承過程の研究

受入教官 荒牧教授

期間 七月八日〜二月三日

。Françoise Bottero フランス国立科学

センター研究員

漢字の特質とその諸問題

受入教官 高田助教

期間 七月八日〜

一九九七年七月七日

。張 寶三 国立台湾大学副教授

日本近代京都学派中国經学研究述論の

研究

受入教官 金助教

期間 八月一日〜

一九九七年七月三十一日

。Klaus Kracht ベルリン＝フンボル

ト大学教授

日本のクリスマスについての社会史的

研究

受入教官 横山助教

期間 九月四日〜一〇月三十一日

。Ljiva Kohn ポストン大学準教授

中国中世における道教の戒律の研究

受入教官 吉川教授

期間 九月一八日〜

一九九七年八月三十一日

外国人研究生

。Wolfgang Lehnert ファルハ建築事

務所建築技師

一九世紀日本における住宅の変容と壁

の構法

受入教官 田中教授

期間 四月一日〜

一九九七年三月三十一日

東洋学文献センター講習会

。一九九六年度漢籍担当職員講習会（漢

籍電算処理）

第一日（九月三〇日）

図書館とマルチメディア（講演）

大型計算機センター教授 金澤正憲

漢字コードの話―漢字と外字の処理

―（講義）

大型計算機センター技官 小澤義明

東洋学文献類目冊子体作成について

（講義）

大型計算機センター技官 河野 典

計算機処理入門（講義）

大型計算機センター技官 隈元榮子

第二日（一〇月一日）

東洋学文献類目の編纂とフォーマット

ト（講義）

村田康彦

漢字典と漢字合成法（講義）

同志社女子大学非常勤講師

丹羽正之

日中台における漢字コードの規格

（講義）

大型計算機センター助手 安岡孝一

漢字コードの問題点とISO

10646 UCS (講義)

学術情報センター教授 宮澤 彰

データベース検索(一)(実習)

第三日(一〇月二日)

中国仏典電子化の諸問題(講義)

花園大学教授 ウルス・アッパ

文書データベースの設計(講義)

大阪国際女子大学教授 桶谷猪久夫

データベース検索(二)(実習)

第四日(一〇月三日)

インターネットの概要(講義)

経済学部助教授 中村素典

インターネットによる情報サービス

(講義)

大型計算機センター助手 石橋勇人

データベース検索(三)(実習)

第五日(一〇月四日)

大学間ネットワークの状況について

(講義)

大型計算機センター技官 櫻井恒正

CD-ROMによる情報サービス

(講義)

大阪市立大学教授 柴山 守

。一九九六年度漢籍担当職員講習会(中

級)

第一日(十一月一日)

漢籍の話(講演)

経部書(講義・実習)

漢籍実習

第二日(十一月二日)

史部書(講義・実習)

懷徳堂文庫の書物(講義)

高野山大学助教授 岸田知子

現地実習(一)(懷徳堂文庫)

第三日(十一月三日)

子部書(講義・実習) 荒牧典俊

現地実習(二)(南禅寺金地院)

第四日(十一月四日)

集部書(講義・実習)

大阪大学教授 福島吉彦

現地実習(三)(陽明文庫)

第五日(十一月五日)

明清の書物(講義)

東京大学東洋学文献センター教授

岡本サエ

一月一七日 中央研究院中山人文社会科学研究所研究員・国立中央大学歴史研究所教授 王世慶ほか四名（交流協会の招へいによる學術視察団一行。山本が応接し、日本および台湾における台湾史研究の現状について懇談した。）

三月二日 光明日報編委 王志偉、光明日報四川記者 站站長 余長安（京都新聞社の招きで来京。森が応接し、中国のマスコミ事情につき意見交換した。）

三月一三日 国立台湾大学教授 許介鱗、中央研究院經濟研究所所長 許嘉棟、中央研究院近代史研究所研究員 林滿紅、国立台湾大学教授 黃俊傑、中華民國總統府國史館纂修 卓遵宏、逢甲大学教授 鄭梓、淡江大学副教授 任耀廷、同 陳翠蓮、台湾省文獻委員會副主任委員 劉寧顔（日本交流協会の招きで来日。狭間、森、石川が応接し、台湾での歴史研究の状況について意見交換した。）

三月一八日 中央研究院近代史研究所研究員兼所長

三月二二日 グラスロー大学教授 David Frisby（専門は知識社会学。ジンメルの再評価を試みた *Sociological Impressionism* などの著書がある。外務省の招待により来日。谷、富永が応接し、ヨーロッパおよび日本における近代とポストモダンについて意見交換した。その後文献センターで書庫を見学した。）

五月二日 中国社会科学院近代史研究所所長 張海鵬（張氏は近代化の幅広い研究者であり、『中国近代史稿地圖集』などの著書がある。阪上と狭間が応接し、懇談。）

十月二六日 四川省社会科学院歴史研究所所長、中華酒文化研究所所長 王炎（専門は中国近代史、酒の文化史にも造詣が深い。狭間、森、石川が応接し、四川の飲酒文化

を中心に意見交換した。)

十一月八日 中国社会科学院近代史研究所副研究員

聞黎明(聞氏は聞一多の研究者であり、

『聞一多伝』『聞一多年譜長編』などの著

書のほか、民主運動、大江会など留学史

にも造詣が深い。狭間、森、J・フォー

ゲルが応接し、「抗戦勝利前後中国知識

分子对美国对华政策的基本認識—以西南

聯合大学為例的初歩考察」の研究報告を

行なった。)

十一月八日 中国文化学院大学元教授 韋政通、北

京大学中国哲学与文化研究所副所長 王

守常(東京での梁漱溟記念講演会で講演

ののち本所に来訪。梁啓超研究班の班員

と梁漱溟の思想について意見交換した。)

十一月十九日 台湾政治大学学長 鄭丁旺(交流協会

の招へいによる視察旅行の一環として来

所。狭間、山本が応接し、本所の共同研

究体制等を説明した。)

十一月二十四日 フンボルト大学教授 Roland Felber

(専門は中国近代史、特にコミンテルン

のドキュメントに精通。狭間、森、石川、

が応接し、出版されたばかりの中国関係

コミンテルン文書集を中心に意見交換し
た。)

十二月二日 中央研究院近代史研究所研究員 張啓

雄、同副研究員 黄自進(張氏は中国近

代政治外交史の専門家であり、「外蒙主

権帰属交渉 1911-1916」の著書がある。

黄氏は日本の対華関係の専門家であり、

『吉野作造対近代中国の認識与評価』の

著書がある。)

十二月六日 中国社会科学院近代史研究所研究員、

経済史研究室主任 虞和平(専門は中国

近代社会経済史。中国の近代化商会の関

係について専著があり、中国近代化の都

市と農村班において「清末以後都市同郷

組織の現代化」というテーマで特別講演

した。)

十二月十七日 ハーヴァード大学ピーボディ博物館教

授 Richard Meadow(メドウ教授は動

物考古学の第一人者であり、中東での遺

跡発掘の現状について熟知している。今

回は地中海、西アジアにおける家畜化の

諸問題に関して、谷、前川と意見を交換

した。)

共同研究からはじまること

齋藤 希史

飛鳥井雅道班長「文学から何が見えてくるか」の「漂荒紀事部会」を中核に再編成された「異言語接触の場としての十九世紀日本」班の最初の仕事は、とにかく『注釈漂荒紀事』を完成させることであった。その作業にあたって、めいめいが電子テキストで原稿を準備し、もちよった Power Book の上で互いに遠慮会釈なくその場で手を入れていく方式をとったことは、効率化というはじめの目的を越えて、共同研究とはどういうことかを考える大きな契機になった。ともに読み、ともに考え、ともに書く。朝から夜中まで、日付が変わることもあった「合宿」研究会は、共同研究のひとつの極点に至っていたかもしれない。どうにかこうにか注釈の完成に目途がついて研究班が心機一転再開したときも、この経験は研究班の核となった。

そもそもが、班長からして若い研究班である。班員それぞれの研究を披歴しあうスタイルはどうも似つかわしくない。万全の調理をすませてきた皿の味見をさ

せられるよりは、調理法がよくわからない素材が下ごしらえだけで目の前に出され、よってたかつて味つけてみるほかないほうが楽しい。そこで、ショートサイクルの会読を行ったり、試行的なテーマで報告していただいたり、ともかくこの共同研究という場から何か新しい研究が——話し手にとっても聞き手にとっても——はじめられるよう腐心した。研究の出発点となるような共通の経験を作ることを第一に考えたのである。もちろんそれが十全に發揮されたとはとても言えないが、この研究班をきっかけにいくつか新しい仕事をはじめりつつあることは、いざれ報告できるはずだ。

この三月で転出する私にとっても、人文研はひとつの出発点である。足の向くまま気の向くままではあっても、この経験の重みは変わらないとおもう。

媒介三年

三 浦 國 雄

横山俊夫さんと藤井讓治さんから、一緒に遊びませんかと誘われてはや三年。〈長〉と名のつくものには久しく縁がなかったので何だか落ち着かなかつたが、上げ膳下げ膳、準備万端調べていただいたお蔭で何とか幕が引けそうである（このあとの論集の刊行がもんだい）。

無責任な物云いになるが、この研究班は確たる成算があつて発足したわけではない。〈媒介〉というテーマは私たちの思いつき、または予感であつた。アジアの歴史と社会を、〈主役〉という二元的な視点、あるいは〈主役〉対〈敵役〉といった二項対立でもなく、人と人、事象と事象との〈あいだ〉に視点を置いて見通してみようというのである。〈あいだ〉と云つても〈関係性〉を扱うのではなく、和辻哲郎の云う〈間〉や〈間柄〉といった虚空間とも少し違う。その〈あいだ〉の〈媒介者〉ないし〈媒体〉の働きは予想外に多様で大きく、媒介されるものと媒介するものとの相互

転換や連鎖によってアジア世界は動いてきたのではないか、というのが私たち——少なくとも私の予想であつた。

とは云つても、私たちの研究班は班員固有のテーマをそれぞれ〈媒介〉の観点から再編成するという方式を取つたので、のべ五十件に及ぶ個人的な研究発表から〈媒介エキス〉を抽出する作業は、各班員に課せられた〈媒介三年〉後の宿題となろう。

中国礼制研究班

小 南 一 郎

我々の中国礼制研究は、以前の「中国古代礼制研究班」と現在進行中の「中国の礼制と礼学研究班」とを合わせれば、七年以上も続いたことになる。すでに一冊の報告書を纏めて出版しているのであるが、中国の古典的な文化において礼制度がいかなる位置と機能を備えたのかなどといった点について、全般的な

見通しを描くには、まだほど遠い位置にある。

日本の観念からすれば、礼とは人間関係の倫理的側面に関わることが多く、それを分析するのは、もっぱら人文科学や社会科学の方法だということになる。

しかし、中国における礼制度の研究には、自然科学についての知識も求められるのである。たとえば、天文学や暦についての知識は不可欠であり、あるいはまた音楽、それも五度上がったり四度下がったりして出て来る調性の問題なども扱わなければならない。高等数学は必要ないにしろ、分数の計算には、注釈の中でしばしばお目にかかる。それも、約分をして簡単な数字にすることがないので、「何千分之何百」といった大きな数の表現にもなるのである。

ただ、そうした数字が出る部分には、テキストの乱れが少なくない。また、そうした部分の論理が十分には追えない場合もある。注釈を書いた人自身に、本当はよく分かっていたのか、テキストを伝承した人々が、内容が理解できないので、十分な校訂を加えられなかったかのいずれかであるに違いない。中国においても、礼学に関わる人々が、全て理科的な頭脳を持っていたわけではないことを知って、いささかは安心するのである。

文淵閣『四庫全書』所収の

『王禎農書』

渡部 武

一九九二年八月、浙江省杭州での中国科学技術史国際学術討論会に参加したついでに、浙江省博物館背後の小高い丘の上にある文淵閣を訪れたことがある。目的は架蔵の『四庫全書』所収の『王禎農書』を閲覧するためであった。周知のように乾隆帝の命によって編纂された『四庫全書』は、北京の紫禁城内の文淵閣を筆頭に内廷の四閣、そして江南地域の三閣（揚州の文匯閣と鎮江の文宗閣は、太平天国の乱によって完全に焼失し、残る文淵閣もこの乱によって甚大な被害を被った。乱後、当地の紳士丁申・丁丙兄弟が市中に売られていた文淵閣蔵書を買戻し、識者たちの努力によって欠本の補充がなされた。問題の『王禎農書』全一〇冊中の九冊はこの時の補充で、原鈔本は第三冊（『百穀譜』六果属、同十一飲食類備荒論）のみで、巻頭に「古稀天子之寶」、巻末に「乾隆御覽之寶」の朱方印があった。私がもつとも期待していた「農器図譜」部分は後補で、携帯していった文淵閣本と逐一比

較対照してみたところ、各種の農具の画風は全く異なり、明の嘉靖本をもとに筆写したものであることが判明した。京大人文研の科学史研究室には文津閣本「農器図譜」のコピー（郭沫若氏から天野元之助氏への奇贈）があり、ここに収められた農具挿絵は文淵閣本とも異なる。解放後、瀋陽から甘肅省蘭州に移された文淵閣本も、たぶん挿絵が異なっていることであろう。一度ぜひ拝見してみたいものである。（東海大学文学部教授）

「象徴主義の研究」班

宇佐美 齊

一九九三年四月に活動を開始して以来、早くもまる四年が経とうとしている。当初の予定通り期限内に成果報告書の作成にこぎつけるべく、九六年秋以降現在（九七年一月中旬）にいたるまで原稿の執筆および検討の作業を続けている。三月末には編集作業を終えて

出来るだけ早い時期に出版できるよう準備を進めていくところである。

成果のほどは報告書を見て判断していただくわけではないが、従来の研究に欠けていたいくつかの重要な視点をあらたに提示することが出来たのではないかと、と期待をもこめて自負している。象徴主義を文学史上の一流派に限定せず、その気運と連動して顕著になりつつあった前世代の芸術家たちの業績の顕彰、発見、再評価をも含めて検討すること、さらに対象を文学に限らず絵画、音楽など諸芸術の相互連関を重視し総合的な芸術運動として捉えなおすこと、要するに近代の表現理論の転換点としての象徴主義の本質を複眼的な視点から検討しなおすことが、私たちの最終的に目指した方向であったと言っている。

四年の期限は通常のそれに比べるといくらか長く思われるかもしれない。しかし少なくとも最初の一年間は班員相互に共通の問題意識を醸成し、共同研究の磁場を形成する準備期間としてやはり必要不可欠であり、その後の二年間を実質的な研究活動に当たるとすると、最後の一年間は上記のように成果報告書の取りまとめに忙殺されることになり、長すぎるどころかむしろあとと言う間の出来事であったというのが実感である。

主体・自己・情動構築の文化的特質

窪田 幸子

主体・自己・情動構築の文化的特質をテーマとした共同研究が始まって三年目になる。この間、多地域の事例について、人類学に限定されることなく心理学、歴史学をふくめた多様なアプローチからの研究報告が活発に、熱心に重ねられてきた。誤解をおそれず粗っぽく一言でいえば主体・自己などの「個」概念についての各地域の事例に基づく通文化比較と概念自体の歴史的検討を通じ、自己概念の多様性と普遍性を検討する、という営みだったと位置づけることができる。そして、三年が過ぎようとしている今、提示されたテーマの大きさとその重要性はさらに明確になってきたといえるだろう。

この共同研究では「個」概念を思想史のなかでとらえ直す作業が行われてきた。その過程で、私自身がいかに「個」概念を安易に、無批判に使っていたのかを思い知った。フィールドの中で、調査者として私自身をどのような「主体」として位置づけるか、被調査者

である人々にどのような「主体」をみいだすのか。あの意味で人類学の実践者として根源的な問いを突きつけられることになった。ただその一点だけでもこの研究会の収穫は大きい。私自身の結論はまだ見えないが、私にとってこの共同研究は結論へと収束してゆくよりも、むしろ拡大に向かっているように思われる。というのも問題は「主体・自己」にとどまらず、あらゆる他の日常の具体的な概念にも通ずることが考えられるからである。(大手前女子大学文学部講師)

所のうち・そと

「人文」での日々

宮崎 昭子

昭和四〇年二月、元気に出勤した夫が通勤途上で倒れ亡くなった。四歳の長女と三か月の二女を連れて新潟から京都の実家へ帰った私は、和文タイプが打てるとの資格で公務員としてその年の八月、人文研へ就職した。

突然の不幸に途方にくれていた私は、「ママ、どうしたの?」と尋ねる長女の声に「いつまでもこれでは」と自分に暗示をかけることにした。朝出がけに「私はハッピー! 笑顔、笑顔」と言いながら鏡に向かう。最初は顔がこわばり涙が出そうになったけれど、不思議なもので自分もまわりの人達もだませるようになり、「幸せ(こっ)」は成功していった。

もうひとつ、それは「お買得商品」になること。中途採用で子連れで、おまけに暗い感じの人を採用して、事務長はじめ皆さん「しまった!」と思っただろう。

お買得になれば信頼も生まれる。例えば、ひとつの文

書をタイプする時、前日に二〇分かかったら、今日は一五分で美しい文書を作ろう、と。ワープロが出現するなんて夢にも思わなかった時代で、修正は練りゴムでたたいて消し、打ち直していた。こうして北白川で約一〇年、東一条で約二〇年の歳月を過ごした。

講演会で「アンナ・カレーニナはよろしいなあー、私は大好きです」と夢見るような目をされた桑原武夫先生。河野健二先生とご一緒に始めた「お習字の会」は今も続く。柳田聖山先生は、分館の研究室でお抹茶をたてて下さった。当時の「人文」といえば輝ける研究所で、先生方に囲まれているうちに色々なことを学んだ。北白川では中庭の池の鯉に職員の名前をつけた。先生方や、事務室、研究室の女性達とよくおしゃべりをした。東一条に移ってからは、バドミントンの仲間に入れていただいた。

退職を前に、私を育てて下さった大勢の人文の皆様から「ありがとう」と申し上げたい。

司書室

田 中 久 子

逆光の中を玄関から階段へと臘脂色の絨緞を踏んで上ると、薄墨色の壁・黒褐色の調度品・金茶色の絨緞・与えられた机の横は茶色の長椅子・それらを照らす高い灰色の天井から釣下がった四角い間接照明。人文研への初出勤——初対面の司書室である。故倉田先生の人文最後の御仕事「漢籍分類目録」は最終段階の索引編成の最中で、作業は複写機とて無く、ばらされた旧目録を手に、講堂の煙くシャンデリアの下で「キッタ、ハッタ」の毎日となった。繁体漢字へのアレルギーは無かったが量の龐大さに圧倒された。

駘蕩たる風のうちに作業を終えておられた川勝先生、爽快な程に仕事を消化された竺沙先生、朝入室するとソファから起上がる（夜中勉強の）図書掛員。居心地良い室に校了後も居り、類目・文献班・書庫内の作業、六七年からの管理換時は整理業務をと教わるともなく教わり、漢籍委員会では四部書整理を習った。本好きのみならず本を愛する——即ち本に対する礼儀を知る人々の中で学んだことは多い。あの頃に比べて今の本

は実に可哀想である。でも増床されるし、何よりも図書室には本を愛する人がいる。これからはかなり幸せになることだろう。

図書業務さえ知らなかった者を、長期間の非常勤の後も同一職場で定員化し居つづけること（学内でも希有な例である）を許してくださった人文研の優しさ暖かさは、他では望む事のできないことである、と恒言しているのは退職を前にした最近だけのことではない。

運筆あれこれ

勝 村 哲 也

二十年前のことだが、ジョセフ・ニードム博士が、北北川の二階の講堂で講演されたとき、大きく板書される漢字の一画一画の筆の運びに魅せられたことを、ついきのうのように想い出す。その字は楷書体で、実に正確であった。しかし何より驚いたのは、筆順が常識とかけ離れていたことである。会場では時々笑いが起ったが、博士は淡々と書き続けられた。學の字は

「メモヨカンムリコ」と書くべしと、私は教わってきた。けれども博士の學は「ヨメモヨ」であった。そこには起筆順とか、王雲五の四角號碼のコンマ以下の約束とか、漢字の書き手にかせられた、あらゆる制約から解放された世界があった。

これもひと昔前の話で、趙樸初先生が、わが老師を訪ねられソバ屋に立ち寄つての帰路、研究所の応接室で休憩をかねて作詩にふけられた折のこと、七律の初句を「蕎麦麵」と始め、「甘」と左方の偏の位置に筆をおろして、黙考に入られた。ややあつて「甘」の上「舌」を重ね書きし、旁に「甘」と添え、ためつすがめつしたあと、次字を小さく「鮮」と認めて筆を置かれた。かくて、当代随一の詞の作者で、郭沫若を凌ぐとさえいわれる右筆家の書が、反故ゆえに私の手元に残った。

漢字情報処理の研究班を始めて三年、研究会の用語で申せば、ニードム博士の漢字はパタン認識、樸老の字は事と次第によつてはバリエーションになつていた、とならうか。げに漢字は異なるもの味なものである。

鴨川の花火

安田 敏朗

京都に比べれば夏も冬も過ごしやすい神奈川県逗子から昨年六月に赴任。親戚・知人もいなければ研究上のつながりも皆無の土地で、しかもその気になれば一日中誰とも口をきかないで済ませられる研究所。雑事に惑わされずに自分の研究に没頭できるかと思いきや、梅雨のうっとうしさに引き続くまわりつくような夏の暑さの上に、研究室の冷房はなかなか使用可能にならず、「ウメサオ」となぐり書きされた年代物の卓上扇風機とにらめっこする毎日。しかも「人文研」に來た以上はすばらしい成果を出さねばならないという重圧。しかし、よくもまあこんな所で昔から大学問・大学者が育つたものだ、凡人にはとても無理な話だ、と赴任二ヶ月あまりで辞めて帰ろうかとさえ思ったある日のこと、ひよんなことから事務・図書の方たちと花火をすることになった。花火は海で打ち上げるもの、と固く信じる湘南人間はあまり気乗りはしなかったが、鴨川の花火も悪いものではなかった。それは花火の質が良かったとか、涼が得られたということでは決して

ない。相変わらず暑かった。しかし、水面に映る光を見ながら、研究に対して気張らずにもっと肩の力を抜けばよいのではないかと持たなくてもよい気負いがなくなっていた気がした。

それから数か月。気負いがなくなつて研究がはかどつたかというところ、冷蔵庫のような冬の寒さに、よくまあこんな所で昔から……。

たとえば喪服のてざわりなど ということ

木 島 史 雄

わたしは、中国の喪服そうふくを主に研究している。これは縁者の死後の、一連の喪の儀式のことである。そして喪服もくふくはその重要なテーマである。中国古代の喪服もくふくには、おおきく五種あつて、例えば斬衰せんさいとは、縁を縫ぬいわないままの苧麻そま製のもののことである。しかしこれまでわたしは、斬衰という語を、服喪ふくまの軽重の程度を表す記号というぐらいにしか考えていなかった。

ところでこのところ、布を手にとる機会がおおい。

というのも、きもの好きが高じて、古着屋をのぞくようになったからである。そこに陳べられる昭和初期のきものには実に多種類の布が用いられていて、私には無限の奥行きをもった魔界とも見える。しかし、一見して、少なくともさつと揉みなでただけで、布の種類に当りをつける人もいる。この違いは何なのか。布についての知識はもちろんだが、それはきもの文化の生死と係わることではないのだろうか。春の終わりに、この織りにこんな染め、模様は少し季節を先取りして、身幅を狭めになどと、世の人なべてがこの無限の可能性を楽しんでいた時代があつた。さればこそ、布の多様さであり、それはきものが文化として成立していたということであろう。そのなかに生きた体験が、この違いをもたらすのだとすると、文化の豊さのなかで担う意味を実感せずには、ただ斬衰といつて、はたしてどれ程のことを私は書物から読み得ているのであろうか。また私にもそこそこ見当がついたりする今出来のきものとは何なのであろうなどと、近頃考えている。

ヴェネツィアの古文書館

高田 京比子

この秋、約二年ぶりにヴェネツィアの古文書館を訪れる機会を得た。建物には、かつての修道院が使用されており、教会のそばにある目立たない戸をくぐって石造りの小部屋と小さな庭を抜けると、ゴンドリエレが客引きする賑やかな外の世界は既に遠い。閲覧室からは、回廊付き中庭と教会の鐘楼が見えて、静かで落ちついた一角を構成している。

私がここに通い詰めていたのは、九三年十月末から四カ月ほどであった。渡伊後二年目にして初めて見る古の人の直筆の記録は、大変感慨深かったことを記憶している。古文書学の授業でコピーが配布されることはあったが、現物は全く違う。書き手の筆の運び方まで伝わってくるような文字の濃淡。公証人の署名の欄に、花を持った手の絵が書いてあったりすると、その遊び心に思わず笑みがこぼれた。テキストとしては、これらが常に過去の「事実」そのものを語っているというわけではないのだから、羊皮紙を手にとって見ていると、やはり七、八百年の時を越えて自分の研究

対象の時代と確かなつながりができたような気がする。

とは言っても、省略記号の多用されたラテン語のマニスクリプトを読むのはかなりきつく、覚悟していたとはいえ最初は頭がくらくらした。基本的には慣れば誰にでも読めるものなのだろうが、十二月半ば頃までは「途中で挫折しませぬように」と祈りたい気持ちであったと思う。それでも、快適な閲覧室と親切なスタッフの方々のおかげで、それなりの仕事は済ますことができたのだが。

日本に帰り、日々過ごす中で、古文書館の持つ時間を超越したような一種独特の雰囲気は忘れかけていたが、久しぶりに訪れ、古びた箱の紐をほどいていると、ここに通っていたのがつい昨日のこのような気がした。今回は駆け足であったが、またゆっくりと古の人の声を聞きに来てみたい。

書いたもの一覽 一九九六年一月〜十二月（氏名五十音順）

●は単行本

飛鳥井 雅道

●注釈漂荒紀事（斎藤希史と共編） 人文科学研究所 四月

●大杉栄評論集（編）注、解説） 岩波書店 八月

『注釈漂荒紀事』のこと 文学 秋号 岩波書店 十月

私の三冊 図書臨時増刊 岩波文庫特集 岩波書店 十二月

荒 牧 典 俊

從漢晉壁畫及副葬物中發現佛像意義

世界宗教研究 六四期 二月

『佛教初傳』をめぐる 橋本高勝編『中國思想の流れ（上）

兩漢・六朝』

中國佛教最初の思想家——康僧會 同右書

晃洋書房 五月

井 狩 彌 介

Y. Ikari, Vādhūla Śrautasūtra 1.1-1.4 [Agnyaḍheya,

Punārādheya]—A New Critical Edition of the Vādhūla

Śrautasūtra, I, ZINBUN (Kyoto University) 30 (1995),

pp. 1-127. 五月

Y. Ikari, Towards a 'Critical' Edition of the Vādhūla

Śrautasūtra — A Report of the New Manuscripts, Festschrift Dr. Paul Thieme, Studien zur Indologie und

Iranistik 20 (1996), pp. 145-168. 六月

石 川 禎 浩

施存統と中国共産党 東方学報京都 六八冊 三月

山室信一報告「日本の国民国家形成とその思想連鎖」に寄せ

て 日本史研究 四〇六号 六月

吉野作造と一九二〇年の北京大学学生訪日団 吉野作造選集月報 一四号 九月

中共創立時期施存統在日本的檔案資料

党史研究資料 一九九六年第一〇期 十月

井 波 陵 一

康熙辛卯江南科場案について 東方学報京都 六八冊 三月

稲 本 泰 生

作品解説（彫刻）

『新修亀岡市史』資料篇第四卷

亀岡市 三月

岩 井 茂 樹

データでみる中国近代史（共著） 有斐閣 十月

宇佐美 齊

私は他者——ランボオの警句を巡って

発達 六五号 ミネルヴァ書房 一月

書評・メランベルジュ著「宮沢賢治をフランス語で読む」

ふらんす 白水社 一月

M・デュラスさんを悼む

産経新聞夕刊 三月五日

●ランボオ全詩集（編訳注）

ちくま文庫 筑摩書房 三月

翻訳・アリユー 中原中也とフランス文学

中原中也研究(創刊号) 中原中也記念館 三月

書評・杉本秀太郎文粹1『エロスの凶柄』

産経新聞 五月二日

書評・デュラス著『これで、おしまい』

産経新聞 六月一六日

「よみ」の理論と読者論 大浦康介編『文学をいかに語るか』

新曜社 七月

曖昧と意味の揺らぎ 同右

書評・飯島耕一著『暗殺百美人』 産経新聞 十月一五日

フランス詩こぼれ話①③ ふらんす 白水社 十一月

詩篇解説・清岡卓行五篇 『日本名詩集成』

学燈社 十一月

梅原 郁

●東京夢華録——宋代の都市と生活(共訳) 東洋文庫五九八

元史刑法志訳注稿(二) 東方学報京都 六八冊 三月

清明集のことなど 宮崎市定追悼録

東洋史研究 五四巻四号 三月

武藤先生と父 『誠の人——武藤誠先生追悼録』

黒川古文化研究所 四月

罰俸制度の展開——旧中国における懲戒

『宋元時代の基本問題』

汲古書院 七月

十二世紀中国の都市・開封の裏面

週刊読書人 八月

●前近代中国の刑罰(編)

大浦 康介

●文学をいかに語るか(編)

岡村 秀典

中国鏡からみた弥生・古墳時代の年代

考古学と実年代 埋蔵文化財研究会 八月

湖北陰湘城遺址一九九六年の調査 福岡からアジアへ4 九月

中国古代における戦争の起源 歴博フォーラム倭国乱 十月

中国初期稲作文化札記 稲作起源を語る

日本文化財科学会 十一月

湖北陰湘城遺址一九九六年春の調査

日本中国考古学会会報第六号 十一月

落合 弘樹

書評・園田英弘・濱名篤・廣田照幸著『士族の歴史社会学的研究』 日本史研究 五〇二 二月

書評・丹羽邦男『地租改正法の起源』

日本歴史 五七五 四月

籠谷 直人

日中戦争前の日本経済外交 第二次「日印会商」を事例に 人文学報 七七 三月

書評・石井修『世界恐慌と日本の「経済外交」——一九三〇—一九三六年』 日ネット ジャパン 4月

日蘭会商(一九三四年六月—二月)の歴史的意義 文部省

科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究」総括班

『東南アジア世界の形成と地域連関の論理』

『東南アジア世界の形成と地域連関の論理』

『東南アジア世界の形成と地域連関の論理』

総合的地域研究一八 五月

書評・「横浜と上海共同編集委員会編『横浜と上海 近代都

市形成史比較研究』横浜開港資料普及協会

史潮 四〇号 十一月

共著 田中琢、宇野俊一、朝尾直弘編『角川日本史辞典』

角川書店 十一月

勝村 哲也

東洋学における漢字計算機処理の現状

人文学と情報処理 一〇 勉誠社 二月

電子漢字六五、〇〇〇字「情報スパー・ハイウエイ」第一

〇回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編

クバプロ 九月

JISX0221 24ドットフォント出力見本—付、補

遺二五〇四一字「文字コードとデータベースの展望」全国

文献・情報センター人文社会科学術情報セミナーシリーズ

ズ四 十月

木島 史雄

『經典釋文』 しにか 七卷三号 三月

陸徳明學術年譜 東方學報京都 六八冊 三月

孔子／孟子／韓非子

井波律子編『中国史重要人物101』

新書館 十二月

「大晋龍興皇帝三臨辟雍皇太子又再莅之盛徳隆熙之頌」にみ

る晋初の礼学とその実践 中国思想史研究 十九号十二月

北垣 徹

●翻訳・F・K・リンガー『知の歴史社会学——フランスとド

イツにおける教養 一八九〇—一九二〇』（共訳）

名古屋大学出版会 三月

金 文京

張愛玲現象を評す しにか 七卷四号 四月

中国イメージシンボル小事典——狐／狗／鼠／卵／龜／五毒

しにか 七卷五号 五月

関漢卿の出自をめぐる——元代における演劇隆盛の背景

『宋元時代史の基本問題』 汲古書院 七月

金庸学のすすめ——知られざる中国文化の一面『金庸の世

界』 徳間書房 八月

詩讀系戯曲考——中国戯曲史の兩大潮流 『漢学研究之回顧

与前瞻』文学言語卷』 北京中華書局 九月

香港文化と金庸武俠小説 サンサーラ 七卷十号 徳間書店

三才図会——図像が示す知的混沌の世界 しにか 七卷十二号 十二月

小南 一郎

編集後記 東方学第九十一輯 一月

有関敦煌本《廬山遠公話》の幾個問題

『中国古代小説国際研討会論文集』 開明出版社 七月

蜀文化と中原文明（龍馬古城遺跡から）

京都新聞 十一月十四日

説工 『華夏文明与伝世蔵書（中国国際漢学研討会論文集）』

中国社会科学出版社 十一月

小山 哲

東と西のはざままで——中欧の歴史、など二五篇 沼野充義編
『世界の歴史と文化 中欧——ポーランド・チェコ・スロ
ヴァキア・ハンガリー』 新潮社 二月
一六世紀ポーランドのふたつの戦争論

人文学報 七八 三月

不死鳥都市の軌跡——ワルシャワ旧市街の戦災からの復興
地域開発ニュース 二五二 十二月

齋藤 希史

●注釈漂荒紀事（共編著） 京都大学人文科学研究所 四月
冒険もの 大浦康介編『文学をいかに語るか 方法論とトポ
ス』 新曜社 六月

朱子語類讀書法篇譯注（五）・（六）（共著）

中國文學報 五二・五三冊 四・十月

新国民之新小説——梁啓超与明治日本文学界 広東康梁研究
会編『戊戌后康梁維新派研究論集』 一九九四年十二月
阪上 孝

はしがき／1・理念と沿革／3・研究活動／5・教育／7・
今後の課題『京都大学人文科学研究所の現状と課題』二月
自由な言論に賭けて 産経新聞夕刊 八月二二日
一片の志哉、月を仰ぐ（河野健二氏との対談）
創造する市民 四九号 十月

著者に聞く 河野健二『歴史を読む・1・革命と近代ヨロ口
ッパ』 岩波書店 十一月

佐々木 克

公と私のあいだの『米欧回覧実記』 言語文化研究七—三
立命館大 一月
小西四郎先生の思い出 茨城県史研究七七
茨城県歴史館 十一月

曾布川 寛

中国古代の太陽表現——馬王堆と三星堆 民族藝術 十二月
「明朝の書画」解説 澄懷堂美術館 三月
中国イメージ・シンボル小事典——太陽・月・水 しにか 七卷五号 五月

中国学最前線 古代美術 しにか 七卷十号 十月

高田 京比子

「明末清初の書画」解説 澄懷堂美術館 九月
一三世紀ヴェネツィア社会における女性の地位と役割——ある
貴族家系の結婚交渉の事例から—— 西洋史学 一八〇号 三月
書評・星野秀利著、齋藤寛海訳『中世後期フィレンツェ毛織
物工業史』 史林 七九卷六号 十一月

高田 時雄

ユリウス・クラププロート しにか 七卷三号 二月
玉篇 しにか 七卷三号 二月
漢字入門（漢字の検索法、音読みと訓読み、呉音・漢音・唐
音・中国、韓国の地名） しにか 七卷六号 五月

中国書店報刊資料部 『世界の古書店』 Ⅲ

(丸善ライブラリー199)

六月

●東洋学の系譜《欧米篇》(編著)

大修館書店 十二月

漢字で書かない中国語 『故宮』(NHK) 第二巻月報十二月

瀧井 一 博

『日本におけるシュタイン問題』へのアプローチ

人文学報 七七号 一月

『シュタイン語で』から見えてくるもの—憲法史と—

国制史の間 比較法史学会編

『文明装置としての国家 Historia Juris 比較法史研究5』

未来社 六月

武田 時 昌

三善清行『革命勘文』所引の緯書曆運説

『中村璋八博士古稀記念 東洋学論集』 汲古書院 一月

田 中 淡

●長安—絢爛たる唐の都(共著)

角川書店 四月

China II. 1 (a) Architectural Structure Materials (b) Plat-

form, *The Dictionary of Art*. (Vol. 6)

Maamulan Publishers

China II. 4 (iv) Islamic Architecture (Vol. 6)

Garden VI. East Asia: Introduction (Vol. 12)

Military Architecture and Fortification VII. 2 China (Vol. 21)

田 中 雅 一

●時間の森へ(横山俊夫・渡辺光嘉・藤原有希子と共編)

株式会社けいはんな 二月

女神の水・女神の血—スリランカと南インドの聖河信仰

福井勝義編『水の原風景—自然とつなぐもの』

FOTO出版 三月

南インド・ヒンドゥー寺院をめぐる起訴(一八八一—一九二

九) 宗教研究 三〇七号 三月

インドの宗教ナシヨナリズムが語る過去

人文 第四二号 三月

現代日本の宗教と性—川崎・かなまら祭考

創文 三八〇号 九月

日本の性信仰の変容と地域社会 民博通信 七四号 九月

●Patrons, Devotees and Goddesses: Ritual and Power

among the Tamil Fishermen of Sri Lanka, Manohar

(New Delhi). 一〇月

書評・鈴木正崇著『スリランカの宗教と社会—文化人類学

的考察』 宗教研究 七〇(三)号 十二月

討論・石森秀三編『二〇世紀における諸民族文化の伝統と変

容3—観光の二〇世紀』 ドメス出版 十二月

ヨーロッパ・アジア・フォーラム参加報告『民族学研究

六一巻二二号 十二月

谷 井 陽 子

清朝漢地征服考 小野和子編『明末清初の社会と文化』

京都大学人文科学研究所 三月

フィリップ・A・キューン『中国近世の靈魂泥棒』(共訳)

平凡社 十月

明代裁判機構の内部統制 梅原郁編『前近代中国の刑罰』

京都大学人文科学研究所 十二月

富永茂樹

知識社会学 『Aera Mook 12 社会学がわかる』

朝日新聞社 一月

編集後記

ソシオロジ 一二五号 二月

●都市の憂鬱—感情の社会学のために

新曜社 三月

Voice and Silence in the Public Space : the French

Revolution and the Problem of Secondary Groups,

Cahiers d'épistémologie, no. 9607, Montreal. 五月

一九八七年、ニースにて 創造する市民 四九号 十月

解題 河野健二「歴史を読む・1・革命と近代ヨーロッパ」

岩波書店 十一月

富谷 至

漢代穀倉制度—エチナ川流域の食料支給より

東方学報京都 六八冊 三月

秦漢二十等爵制と刑罰の減免 梅原郁編『前近代中国の刑罰』

京都大学人文科学研究所 十二月

大英図書館蔵敦煌漢簡

中国社会科学院簡易研究中心篇『簡易研究叢書』

六月

狭間 直樹

初到日本の梁啓超 広東康梁研究会編『戊戌後康梁維新派研究論集』

広東人民出版社 一九九四年十二月

●データでみる中国近代史(共著)

有斐閣 十月

藤井正人

Kena-Upanisad (= Jaiminiya-Upanisad-Brahmana 4, 10 [4, 18-21]) 今西順吉教授還暦記念論集『インド思想と仏教文化』

春秋社 十二月

船山 徹

疑経『梵網経』成立の諸問題

仏教史学研究 三九—一 十月

前川 和也

Confiscation of Private Properties in the Ur III Period : A Study of *é-dul-la* and *nig-GA*, *Acta Sumerologica*, no. 18.

十一月

水野 直樹

「戦後五〇年」「憲法五〇年」と在日外国人の人権

グローブ 世界人権問題研究センター 一月

在日朝鮮人・台湾人の参政権を「停止」した二つの文書 青鶴 第八号

KJM研究センター 三月

在日朝鮮人・台湾人参政権「停止」条項の成立—在日朝鮮人参政権問題の歴史的検討(一)

世界人権問題研究センター 研究紀要一号 三月

●朝鮮近現代史における金日成(共著)

神戸学生青年センター出版部 八月

●論集 朝鮮近現代史(共編)

明石書店 十二月

麥谷 邦夫

古典の世界 抱朴子内篇(1)/(2)/(3)

中国語 七/八/九月号 六、七、八月

食物禁忌の起源とその社会的文化的影響

浦上財団研究報告書 五号 十二月

天界の神々——星に祈る

しにか 八巻一号 十二月

森 時彦

●データでみる中国近代史(共著)

有斐閣 十月

矢木 毅

朝鮮初期の徒流刑について 梅原郁編『前近代中国の刑罰』

京都大学人文科学研究所 十二月

安田 敏朗

基礎日本語の思想—戦時期の日本語簡易化の実態と思想 比較文学・文化論集 一一号

東京大学比較文学・文化研究会 一月

「王道楽土」と諸言語の地位—「満洲国」の言語政策・試論

アジア研究 四二巻二号 アジア政経学会 四月

「満洲国」の「国語」計画—制度と実態 戦後五〇年、いま

「満蒙開拓団」を問う シンポジウム報告論文集 十一月

「満蒙開拓団」調査研究会

山室 信一

書評・石川九楊『書字ノススメ』 中央公論 一月

対談・満州体制か四〇年体制か(小林英夫氏と)

図書新聞 二二八三号 二月二四日

書評・水谷三公『イギリス王室とメディア』中央公論 二月

日本の国民国家形成とその思想連鎖

日本史研究 四〇三号 三月
司馬文学再読・土地と日本人 産経新聞 三月一五夕刊

今や則ち亡し「時門の束をひもといて・追悼土屋健治」三月

書評・子安宣邦『「宣長問題」とは何か』中央公論 三月

上村希美雄著『宮崎兄弟伝 アジア篇・中』に寄せて

熊本日日新聞 四月二二日夕刊

書評・大久保利謙『日本近代史学事始め』中央公論 四月

近代日本の国民国家形成とメディア—アジア観と関連して

NIRA政策研究 九巻四号 四月

書評・上坂冬子『三つの祖国』中央公論 五月

日中教育交流と国家形成 『進展する東アジア地域間の交流』

日中友好会館 六月

満洲国の思想宣伝メディア

アジア—幻像から実像へ 季刊民族学 七七号 七月

書評・沈潔『満洲国』社会事業史 朝日新聞 八月一四日夕刊

図書新聞 二二〇七号 八月三一日

官僚制の共振 歴博 七九号 十一月

日本政治思想史『アエラ・ムック17・政治学がわかる』

朝日新聞社 一二月

「官治」支えた情報の位階制

毎日新聞 十二月二二日

山本 有造

書評・疋田康行編著『南方共栄圏』—戦時日本の東南アジア

「満洲国」生産力のマクロ的研究・序説—「満洲国産業生

産指数」の検討を中心に 経済研究 四七巻二号 四月

選評・杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』

日本経済新聞 十一月三日

横手 裕

白玉瞻と南宋江南道教

東方学報京都 六八冊 三月

横山 俊夫

Gajin: Fremde in Japan, A. Ueda, ed, *Die elektrische Geisha, Entdeckungsreisen in Japans Alltagskultur*, Göttingen: Günter Peperkom, 1995. 九五年
共訳編・各員からの提言 第三者のために

京都大学人文科学研究所 九五年十月

監修・校訂／Things Japanese: Traditional Japanese Noodles, *Udon and Soba*, *Sumitomo Quarterly*, winter 1996, No. 63 一月

談・「貝原益軒―天地和楽の文明学／益軒は私のディスカバー・ジャパン」 毎日新聞(全国版) 二月一二日

Marathon Seminar: "Humans, Other Living Things, and the Nature of Time", *Keihanna Annual Reports '94-95*, Keihanna Interaction Plaza, Inc. 二月
●編著・時間の森へ―マラソンセミナー「人間・生物・時間」
が贈る対話・体感・実験のひとつとき

株式会社けいはんな 二月

校訂・益軒先生 日々の楽しみ

1995年報 サントリー株式会社不易流行研究所 三月
討論参加・川那部浩哉・田端英雄編『生態学からみた安定社会―里山とその自然の持続的利用』

財団法人京都ゼミナールハウス 三月

共同執筆・京都大学における国際交流

国際交流委員会 三月

談・「貝原益軒―天地和楽の文明学」の編者

京都新聞 三月二〇日

共同作成・「国立総合芸術センター(仮称)」構想に関する調査研究報告書(財団法人関西文化研究都市推進機構宛)

財団法人千里文化財団 三月

監修・校訂／Things Japanese: *Furoshiki, A Square Cloth with Various Uses in Everyday Life*, *Sumitomo Quarterly*, spring 1996, No. 64 四月

校訂・ブリキッテ・シテータ「現代日本の眼り」*The Sunday Report*, No. 30, 株式会社けいはんな 四月一五日
共同編集・こうとうけん二一号

財団法人国際高等研究所 四月

楽しい脱成長社会の模索

●編著・安定社会の総合研究―ものをつくる・つかう(第七回 毎日新聞夕刊(全国版) 六月二七日
京都国際セミナー)

財団法人京都ゼミナールハウス 六月

監修・校訂／Things Japanese: *Green Tea, Medicinal Effects Reevaluated*, *Sumitomo Quarterly*, summer 1996, No. 65 七月

討論参加・グローバリゼーション―個の確立と縁(第9回富士会議報告96) 日本アイ・ピー・エム株式会社 七月

討論参加・地球の中のいのち―生命の経済(第13回95比叡会議報告書) 日本アイ・ピー・エム株式会社 八月

編集・とうんばらー通信 一号 文部省科研費基盤研究(A)

人文研横山研究室 八月二三日

いの中の緑―田中一村「奄美の杜」／パウル・クレー「舵手」(日曜くらぶ「二枚の絵」)

毎日新聞(全国版) 八月二五日

討論参加・編集／一〇周年記念フォーラム記録 現代におけるこのころの問題(河合隼雄・石田隆一・劉智剛・杉田繁治各氏と)

国際ソロプチミストアメリカ日本中央リジョン 八月

編集・翻訳・校訂・けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」(第七回研究会記録)

株式会社けいはんな 八月

談・校訂／関西の生活美学(伊田彰成編)

縁 七二号 関西電力株式会社 九月

討論参加・陶芸の未来を開こう、IAC日本会議(乾由明・P・グリーンハーフ・李慶成・R・A・ククタ・柳原陸夫各氏と)

佐賀新聞 九月二九日

鼎談・二十一世紀の花鳥風月 その一、言葉／つたえる(石川九楊・松井孝典両氏と)

中央公論 十一月

競争の野蠻から共楽の文明へ

月刊みんぱく 千里文化財団 十一月

校訂・木田安彦「鎌倉の大仏」

あうろーら五号 二一世紀の関西を考える会 十一月

共同編集・こうとうけん 一一号 財団法人国際高等研究所 十一月

監修・校訂／Culture of Japan: Traditional Japanese Musical Instruments Are Creating a New Genre in Music, Sumitomo Quarterly, autumn 1996, No. 66

編集・とうんばらー通信 二号 文部省科研費基盤研究(A) 十一月

人文研横山研究室 十一月一九日

21세기の花鳥風月(右記中央公論掲載鼎談の韓国語訳)

日本서림(ソウル) 三一号 一二月

吉川 忠 夫

『真誥』訳注稿前言

東方学報京都 六八冊 三月

●三余録

中外日報出版局 三月

法堂倒る(宮崎市定博士追悼録)

東洋史研究 五四卷四号 三月

●竹林の七賢

解説・宮崎市定著『史記を語る』(岩波文庫)

岩波書店 四月

「中外日報」社説 一九回

世界思想社 十二月

一月〜十二月

人
文
第四三号
一九九七年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品